
名探偵アスカ 3殺目

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵アスカ 3殺目

【Nコード】

N6745A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

今や人気の売れっ子アイドル、木之本アスカと入れ替わった高校生探偵の宮部拓也は今回もまた事件に遭遇。そして、アスカの身に不思議な事が・・・。

これまでのアスカ（前書き）

遂に、名探偵アスカも新章の始まりです。

今宵は、アスカの身に起こった不思議な体験の話をしたいと思います。

勿論、事件は毎度の事。

これまでのアスカ

俺は、高校生探偵の宮部 拓也……。

つい最近、俺は学校帰りの途中で坂を下って来たアイドルの木之本 アスカと出会った。

そして、その後に二人一緒に坂を転げ落ちて、目が覚めたら、体が入れ替わっていたの。

それからと言うものの、私は元に戻る方法を考え色々試してみたけど全て失敗に終わった……。

そんな中、私は色々な事件に出くわす……。

肉体が替っても頭脳は同じ。

迷宮無しの名探偵！

その名も、名探偵アスカ！

アスカの怖い怖い遊園地

私は今、偵探公園にいる。

理由は、アスカに会う為である。

お、噂をすれば見た目が宮部 拓也のアスカがやって来た。

拓也…「アスカ、遅くなってごめん。」

良いさ、私も今来た所だから。

って、アスカの奴、今私の事アスカって言ったな。

私は拓也なのに何で？

アスカ…「アスカは君でしょ。」

拓也…「いっけねえ！」

自分が拓也のつもりでいた。

俺、最近、心が拓也になってて、意識しないと忘れちゃうんだ。」

何だ、そっちもか。

と言うか、もう既に心が染まってるよ！

拓也…「そんな事より、この間、近くにトライアルランドってのが

出来たんだけど、一緒に行かないか？

いつもアスカはアイドルの仕事で大変だろ？

たまには休息も必要かなって思ってたんだけど……。」

コイツ、またアスカって言ったよ！？

ああ面倒臭え。

私は、「行く」とだけ言って行く事にした。

トライアルランドに来ると、私たちは最初に入園券を購入した。

そして、その入園券で園内に入園する……。

拓也…「噂には聞いてたけど、こんなにも広いとはな。」

と、拓……じゃなくて、アスカが言った。

私もそろそろ危ないな。

アスカ…「拓也君、どこから乗ろうか？」

私はそう言った。

ってちよと待て！

今、拓也言うたよ！

拓也は俺なのになぁ・・・。

拓也・・・「あれなんかどうかな？」

そう言っつて、拓也は入り口から斜め右前にあるジェットコースターを指差した。

dragon fly・・・。

看板にはそう書いてあった。

アスカ・・・「良いわね、乗りましようか。」

私はそう言っつて、拓也君と列に並んだ。

列に並んだのは良いが、dragon flyは待ち時間が1時間だと言われた。

アスカ・・・「しょうがないね・・・他の行こうか？」

拓也・・・「そうだな。」

私たちは、その場を後にした。

次に、私達が行った所は、廃墟病院だった。

廃墟病院はおばやけ屋敷の事で、世間ではかなり怖いとの事で評判だ。

私達は、廃墟病院に入る事にした・・・。

廃墟病院に入ると、如何にも何かが出そうな雰囲気だった。

アスカ・・・「拓也君、怖い・・・。」

拓也・・・「大丈夫、俺が付いてるから安心しろ。」

何やってんだ俺？

私はそう思った・・・。

拓也・・・「何か書いてある。」

と、拓也君が指を差して言った。

私は拓也君の指差した方を見た。

すると、そこには「最上階まで行ってスタッフからある物を受け取れ」とあった。

拓也君は、先へ進もうとした。

アスカ…「拓也君、ちょっと待って。

まだ続きがあるよ。」

メッセージには続きがあり、「途中には君たちの行く手を阻む幽霊たちがいる、そんな彼らから無事に逃げ切れるか？」とあった。

成る程、私達を脅かして脱落させるつもりだな……。

面白い、やってやろう。

私達は、先に進む事にした。

右に行ったり、左に行ったり、ナースステーションの前を通ったり、患者さんの部屋に入ったり色々な所を回った。

しかし、お化けらしいお化けは一匹も見当たらなかった。

そう思っていると、階段に辿り着いた。

そして、壁には鏡が設置してあった。

病院の鏡と言えば、病院の鏡に映るうすら笑いの女が有名だ。

そんなまさかな。

私はそう思っていた。

だが、その思いは一瞬にしてかき消されてしまった。

何故なら、その鏡にうすら笑いの女の姿が映ったからだ……。

アスカ…「キャアアアア！」

私は、無意識の内に悲鳴をあげてしまった。

それに続いて、拓也君も悲鳴をあげた。

……ったく、男が聞いて呆れるぜ……。

ん、この鏡……よく見ると表面に小さな点の粒が何千個見える……。

これって、テレビ等に使われてるブラウン管か？

だとすると、近くにカメラが仕掛けてあり、それに映った物を反転させ、そこにうすら笑いの女性をコンピュータ合成しているんだな。

私はそう確信した……。

アスカ…「何だ、タネが解れば怖く無いや。」

私はそう言いながら笑った。

拓也…「なに、幽霊の正体が解ったの？」

アスカ…「うん・・・これは、ブラウン管を使ってるんだ。

それで、どこかにカメラが仕掛けてあって、それに映った物を反転させて、うすら笑いの女性をコンピュータで合成してるんだよ。」

すると、拓也君は「成る程ね」と言った。

拓也…「アスカって物知りなんだな。」

アスカ…「伊達に人生はやってないよ。」

私達は、話しながら階段を上った。

階段を上り切ると、一人の男が頭から血を流し、壁に寄りかかって座っていた・・・。

どうせ特殊メイクだろう・・・。

私はそう思って男を置き去りにしようとした。

すると、男はいきなり・・・。

男…「此処から先には行くな。

この先には、悪い妖怪が住み着いている・・・。

先ほど、俺の友人が妖怪にとり憑かれて俺を襲って来た・・・。
お前たちもこうなりたくなかったら先には行くな。」

と、男は私たちを止めた。

だが、私達は気にせず先に行った。

すると、目の前に人間サイズの黒い影が現れた・・・。

どうせホログラムだろう・・・。

私はそう思って気にしなかった・・・。

ホログラムらしき物は、私達の方へ向かって来た。

そして、拓也君の体と重なった。

その瞬間、拓也君は私を襲って来た・・・。

マジ、どうなってるの!?

私は疑問に思い、色々な視点から見つめてみた。

すると、ひとつの理論に達した・・・。

それは、暗示である。

先の男が暗示を掛けたのである・・・。

と言う事は、先の男もスタッフ?

って、そんな事してる場合じゃない！

拓也君に掛かった暗示を早く解かないと。

私は、暗示を解く方法を知らなかったのも、無理矢理解くしか無かった。

私は、拓也君をぶっ叩いた・・・。

すると、拓也君は我に返った。

拓也・・・あれ、俺は今まで何してたんだ？」

アスカ・・・暗示に掛かってたのよ。

多分、あのオッサンが掛けたんじゃないかな・・・。」

拓也・・・いくらお化け屋敷だからと言っても、今のはちょっとやりすぎだな。」

アスカ・・・そうだ、こっちから仕返しに何かやってみない？」

拓也・・・それ良い！」

私たちはどんな仕返しをするか考えた。

その時、先ほどのオッサンの「ウワァッ」と言う悲鳴が聞こえた。私たちは先ほどの階段の前まで行った。

すると、そこには胸にナイフを突き刺され亡くなっているオッサンの姿が見えた。

一体、オッサンの身に何が？

アスカの怖い怖い遊園地（後書き）

次話からメインのミステリーとなります。

廃病院化け屋敷殺人事件！

悲鳴を聞き、私たちが駆けつけて見ると、先ほどのオッサンがナイフで胸を刺されて亡くなっていた・・・。

悲鳴を聞いた時刻はA.M. 11・35・・・。

恐らく、それが殺害された時刻だろう・・・。

私は、警察に連絡をした。

暫くすると、警察がやってきて現場検証などを始めた。

狩屋刑事…「おお、アスカ君に宮部君では無いか。

今回は君たちが第一発見者かい？」

と、狩屋刑事。

アスカ…「ええ、まあ。」

狩屋刑事…「君達の行く所、事件ばかりだな。」

と、笑いながら言った。

笑い事じゃねーよ。

刑事…「狩屋さん、被害者の身元が判明しました。」

狩屋刑事…「そうか。」

刑事は、被害者の身元を言った。

被害者は、本田 勝哉^{ほんだ かつや}25歳。

トライアルランドの化け屋敷の従業員で、やって来た人達に暗示を

掛けて悪戯^{いたづら}をする役をしている人だ。

死因は心臓を一付きされていてほぼ即死状態だった。

死亡推定時刻はA.M. 11・35、私達が悲鳴を聞いた時と一緒にだ。

身元が判明すると、被害者の交友関係が洗われた。

一人目は、同じ化け屋敷の従業員で新田 愛^{にった まな}20歳。

新田は、階段の所にある鏡に映る女の役をやっている。

二人目は、黒川 愛美^{くろかわ まなみ}25歳。

黒川は、3階で生首の役をやっている。

被害者とは仲が良く、非番の時には二人で遊んだり、ドライブした

りするぐらいだ。

いわゆる恋人と言う関係である。

三人目は、時遠ときとお 織姫おりひめ25歳。

被害者とは、小学校の頃からの親友で仲が良かったし、良く喧嘩もする程だった。

四人目は、桐山きりやま 新太郎しんたろう26歳。

被害者とは、余り仲が良いと言う別けでもなく、たまに話をする程度だった。

以上が、被害者の交友関係を洗って出てきた四人の容疑者である。

アスカ…「……………」

私が考え事をしてると誰かの声が聞こえた。

多分気のせいだろう。

拓也…「アスカ、聞してる？」

ん、気のせいじゃないのか。

アスカ…「え、何!？」

拓也…「人が話しかけてるのに『え、何!？』は無いだろ。」

アスカ…「ゴメン……………」

で、改めて聞けど…………何？」

拓也…「いや、怖い顔してたからどうしたのかなって。」

アスカ…「あかし、そんな顔してた？」

拓也…「してた。」

何か考え事でもしてたの？」

アスカ…「可笑しいんだ。」

拓也…「可笑しいって何が？」

鈍いな、お前。

私は、被害者の悲鳴が聞こえた時に人影が見えなかった事と、階段を下りて逃げる事も不可能だと言う事を言った。

拓也…「何で無理なんだ？」

バカだ……………」

拓也君がこんなにバカだと思わなかった。

アスカ…「良い、順を追って説明するよ。」

まず、犯人が被害者に近づいて胸をナイフで刺す。すると、被害者が悲鳴を上げる。

その後、犯人は逃げるんだけど、上には私達がいて逃げられない……。

もし行くと、顔を見られる可能性が高い。

だからと言って、下には隠しカメラがあるから誰かが通ればそれを監視している人が気づく……。

つまり、犯人はどちらにも逃げられないのよ。」

すると、「それは本当か？」と、狩屋刑事が来て言った。

アスカ…「嘘ついてどうするんですか？」

あの時、被害者に近づいた人は誰もいません！」

狩屋刑事…「だとすると、犯人はどうやって被害者を……。」

そこが問題なんだ……。

もし、本当に誰もいなかったとすると、被害者はどうやって死んだんだ？

被害者の死の謎

私は、階段のうすら笑いの女性が映る鏡の前に来ていた。隠しカメラを探す為だ・・・。

アスカ・・・「あれ、何かさっきと違う・・・。気のせいかな？」

何が違うかって？

それは、鏡本体がである。

アスカ・・・「もしかして、この鏡・・・。」

私は鏡を叩いてみた。

すると、空洞の壁を叩いている様な音が聞こえた・・・。空洞の壁！？

私は、鏡の裏に何かがあるのだろうと思い、鏡を念入りに調べた。すると、鏡がスライドする事に気が付いた。

私は、鏡をスライドさせてみようとした・・・。

しかし、鏡はびくともしない。

何かで固定されているのでは？

そう思った時、新田が声を掛けて来た。

愛・・・「あの、鏡の前で何をなさっているんですか？」

アスカ・・・「あ、新田さん・・・。」

その、新田さんに聞きたい事があるんですけど・・・。」

愛・・・「何、何でも教えてあげるわ。」

アスカ・・・「この鏡・・・スライドしますよね？」

愛・・・「ええ、するわよ。」

でもどうしてそんな事？」

アスカ・・・「え、ちよつと気になったから・・・。」

それより、この鏡がスライドするとなると、内側はどうなってるんですか？」

新田は、鏡の裏側に制御装置があると言う事を話した。

そして、鏡のスライドはその制御装置で行うと言う事も話した。
成る程・・・。

でも、肝心なカメラが・・・。
私はその事を新田に聞いた。

すると、新田は鏡をスライドさせればブラウン官が出て来て、その真ん中に小さい穴があり、そこにカメラがあるとと言う事を話した。
アスカ・・・新田さん、そのカメラって録画はしてないんですか？」
愛・・・「してないわ。」

この仕掛けはね、あそこにあるセンサーで動いてるの。」
と、指差して言った。

私は、新田が指差した所を見た。

そこは、鏡から3メートル程離れていた・・・
成る程、そこを通るとセンサーに掛かって自動的に鏡がスライドしてブラウン管が出てくるって仕組みね・・・。

待てよ、もし犯人がそこを通ったら制御装置の前にいる人に見られるんじゃない・・・。

アスカ・・・「新田さん、センサーに引っ掛からずに廃病院を出入りする事は出来ますか？」

愛・・・「廃病院の出入りは、センサーに引っ掛からない様にするのは無理ね・・・。

でも、制御室なら鏡の横にある非常口から行けるわよ。」

非常口か・・・。

あれ、さっきから何であるのか気になっていたんだよな・・・。

待てよ、犯人が非常口から出入りしたとなると、あの人しか・・・。
いや、考えすぎか。

犯人が非常口を使ったんなら外部犯の可能性もあるからなあ・・・。
取り敢えず、私は4人のアリバイを聞く為、狩屋刑事の所へ戻った。
狩屋刑事・・・「アスカ君、何やってたんだね？」

事件、もう解決してしまったぞ。」
事件が解決した。

どう言う事だ？

狩屋刑事は、犯人が自分から名乗り出たと言った。

アスカ…「それ、本当ですか？」

狩屋刑事…「ああ、何でも、新田^{にっ} 愛^{まな}が自分がやったと言ってるんだ。」

え、新田が？

何故彼女が被害者を？

私は、新田に聞いてみた。

愛…「はい、私がやりました。」

アスカ…「動機は？」

愛…「私、本田さんに侵されてたんです。

最初は、嬉しかった。

本田さん、私に気があるんだって思ってた。

だけど、後で遊びだって事が解ったの。

だから、殺しちゃった。」

と、新田は軽々しく言った。

アスカ…「新田さん・・・人の命を何だと思っているんですか!？」

愛…「あんな人の命なんてどうでも良いわ。」

何て奴だ・・・。

私は呆れてものも言えなかった。

狩屋刑事…「それじゃあアスカ君、新田 愛を連れて行くからな。

何かあったら携帯に連絡をくれ。」

そう言って、狩屋刑事は新田に手錠を掛けて連れて行った。

これで事件は終わりなのか？

聞き込み

私は、生首役の黒川 愛美に会った。

アスカ…「黒川さん、新田さんが本田さん殺害の容疑で逮捕されました。」

愛美…「え、本当に!？」

本当に彼女が!？」

アスカ…「本人はそう言ってます。」

愛美…「やっぱり……。」

やっぱり?

愛美…「私、休憩の時に見ちゃったのよ。

誰かが勝哉に言い寄ってる所を。」

アスカ…「言い寄ってる?」

愛美…「ええ……。」

まさか、彼女だったとはね……。」

何だ、この違和感……。

愛美…「それより、木之本 アスカちゃんよね?」

アスカ…「そうですけど……。」

愛美…「あの、良かったらサインもらえませんか?

うちの弟が大ファンなんです。」

私は、色紙とペンを貰い、それを使ってサインを書いた。

愛美…「ありがとうね。」

アスカ…「どう致しまして……。」

それにしても、本当にあの子が犯人なのだろうか?

私は気になって仕方が無かった……。

私は、もっと情報を集めるべく、被害者・本田 勝哉と親しかった時遠 織姫に会った。

織姫…「え、愛ちゃんが勝哉君を殺して捕まったの!？」

そんな……あの子、人を殺せる様な子じゃないのに……。」

アスカ…「殺せる様な子じゃないって？」

織姫…「あの子ね、気持ちを表に出せない子なのよ。

何かをしようと心に決めても、実行しないタイプなの……。

だから、人を殺せる様な子じゃないのよ。」

人を殺せる様な子じゃない……。

誰かを庇ってるのか？

織姫…「きっとあの人よ！」

アスカ…「え？」

織姫…「絶対あの人が犯人だわ！」

あたし、話を聞いて来る！」

時遠は、そう言って走ってどこかへ行ってしまった……。

アスカ…「時遠さん!？」

私は叫んだ……。

しかし、時遠には聞こえなかった。

そりゃそうだ、彼女の姿はもう見えなかったんだからな……。

次に、私は4人目の容疑者である桐山 新太郎に会った。

新太郎…「えっ、愛が逮捕されたって!？」

な、何かの間違いだろ？」

アスカ…「私もそう思います……。

だけど、彼女……自分でやったって供述してるんです。」

新太郎…「そうか……。

愛……自分で言ってるのか……。」

アスカ…「あの、さっきから愛って言ってるけど、どういう関係な

んですか？」

新太郎…「俺、愛と付き合ってるんだ……。」

あっそ……。

えっ、付き合ってるう!？」

聞いてないぞそれ!

新田さん……もし無実なら、桐山さんの為にも助けてあげたい……。

私はそう思った。

その時、拓也君が慌てながら私の所へ駆けつけて来た。
アスカ…「拓也君、どうしたの!？」

拓也…「時遠さんが・・・時遠さんが死んでるんだ!」
な、何だって!？」

私は、拓也君に現場を案内して貰った。

拓也…「此処だよ。」

そこは、従業員の休憩室だった。

私は、休憩室に入った。

そして、そこで見たものは!？」

時遠織姫殺人事件！

私がそこで見たのは、腹や胸、顔等を滅多刺しにされた時遠織姫の無惨な姿だった。

私は時遠に近付き、遺体を調べた。

アスカ…「亡くなって間もない……。」

拓也…「ねえ、何か書いてあるよ？」

と、拓也君は指を差して言った。

私は、それを読んだ……。

それは、血文字で「Love」と、書いてあった。

Love……あい……新田^{にっ}愛^{まな}の事か？

だけど、新田は捕まって……。

すると、私の携帯が鳴った。

私は、携帯に出た。

相手は、狩屋刑事だった。

狩屋刑事は、新田が逃げたと言った。

私は、驚きとまどっていた。

アスカ…「新田さんが、逃げた……。」

私は思わず口を溢した。

拓也…「新田さんが逃げたって、本当なのか！？」

拓也君は私に聞いて来た。

何がどうなってるのか私には分からなかった。

叫びたかった……。

そう思った時、頭に激しい痛みが走った。

私は、その場にしゃがみこんで頭を抱えた。

拓也…「だ、大丈夫か！？」

大丈夫じゃない。

私は、答える余裕すら無かった。

そして、私は気を失った……。

目が覚めると、俺は見知らぬ場所にいた。

拓也…「アスカ、大丈夫か!？」

俺が俺に話し掛けてる……。

え、俺が俺に話し掛けてる!？

あ、そうか……。

俺は今アスカなんだっけ。

アスカ…「此処……何処？」

拓也…「トライアルランドの医務室だよ。

アスカ、急に倒れっから心配したんだぞ。」

トライアルランド？

何で此処にいるんだ？

全く記憶に無い……。

アスカ…「何でこんな所に……。

全く記憶に無い……。」

拓也…「記憶が無い？

お前、大丈夫か？

俺の事、解るか？」

アスカ…「そのぐらいいは解るぞ。

お前、アスカだろ。」

拓也…「何言ってるんだよアスカ。

アスカはお前だろ。

俺は、拓也だ、宮部 拓也。」

アスカの奴、何言ってるんだ？

まるで、俺がアスカでアスカが俺みたいな。

いや、その通りだ。

現に俺の体はアスカだ。

きつと、俺が可笑しいのだ。

アスカ…「ごめん、どうかしてた……。」

拓也…「どうかしてたじゃないよ。」

お前、頭抱えながら『痛い』って何度も何度も……俺が医務室に連れてくるまで言い続けてたんだからな。」

そうなのか？

全く記憶に無い……。

俺は、あの日……あの坂道で転げ落ちて俺とアスカの身体が入れ替わって、それから……。

それから殆ど記憶が無い……。

アスカ…「あれから何日経ってる？」

拓也…「あれから？」

あれからって何時から？」

アスカ…「坂道……。」

明丹高校から宮部家までの道の途中に坂あるでしょ。

あそこから二人一緒に転げ落ちてから何日経ってる？」

拓也…「お前、何言ってるんだ？」

俺達は二人一緒にあの坂道から転げ落ちた事なんか無いぞ。」

転げ落ちた事が無いってどういう事だ……。

俺、頭こんがらがって来たぜ……。

その時、一人の男が医務室にやって来た。

それは、狩屋刑事だった。

狩屋刑事…「アスカ君、具合はどうだね？」

アスカ…「何だかボーっとしちゃって……。」

狩屋刑事…「大丈夫かね？」

宮部君の話では頭を抱えて痛いってずっと言い続けていたそうじゃないか。」

どうやらそうらしいな。

だけど、その時の記憶が無いんだ……。

だから、何を言われても答えられない……。

狩屋刑事…「そうだ、時遠 織姫が殺されたと宮部君から聞いたが本当かね？」

そら来た。

俺に答えられない事が・・・。

アスカ…「本当です。」

何答えてんだ俺？

狩屋刑事…「直ぐに現場へ案内してくれ。」

そんな事言われてもなあ。

そう思ったが、先に俺の身体の方が動いていた。

アスカ…「こちらです。」

俺は、狩屋刑事を現場に案内した。

最後の推理

狩屋刑事…「従業員用の休憩室か……。」

アスカ…「体中を滅多刺しにされてますので引くかもしれません……。」

何言ってるんだ俺？

狩屋刑事…「そ、そうなのか？」

そう言っ、狩屋刑事は中に入って行った……。

そして、俺もそれに続く。

狩屋刑事…「本当に滅多刺しだな……。」

狩屋刑事は言った……。

俺は、遺体を見た……。

すると、激しい頭痛が襲って来た……。

俺は、その場にしゃがみ込んで頭を抱えた。

その瞬間、全てを思い出した。

自分がアスカと入れ替わってから心がアスカに染まっていた事、その間に起きた事件の事、何もかも全て思い出した。

狩屋刑事…「アスカ君、大丈夫かね!？」

狩屋刑事は驚きながら聞く……。

アスカ…「大丈夫です……。」

それより、新田さんが逃げたと言う事ですが……。」

狩屋刑事…「おお、そうだったな……。」

新田さん、廃病院を出た所で逃げ出したんだ。

それ以来、行方が掴めないでいるんだ……。」

廃病院を出た所で逃げ出した……。

俺が時遠織姫の遺体を発見した頃だろうな。

あの時に電話が掛かって来たから間違い無い……。

狩屋刑事…「ん、血文字で何か書かれてるな……。」

狩屋刑事が例の血文字を見つけた。

狩屋刑事はそれを読み上げた。

狩屋刑事…「Love・・・」

どういう意味だね？」

そうか、狩屋刑事は英語を全く知らないんだったな・・・

アスカ…「Love・・・日本語で愛って言う意味ですよ。」

狩屋刑事…「愛か・・・」

ん、そう言えば、新田 愛も愛だな・・・

えーと、こういうのをダイニング・・・」

アスカ…「ダイニングメッセージ・・・そう言いたいんですね？」

狩屋刑事…「そう、それぞれ。」

アスカ…「でも、無理がありますよ。」

狩屋刑事…「何故だ？」

アスカ…「時刻ですよ。」

私が被害者を発見したのが、狩屋刑事が電話を掛けて来たのと同時に。

どう考えても、彼女に殺害する事は不可能です。」

その通り、不可能だ。

と言う事は、犯人は他にいるという可能性がある。

狩屋刑事…「成る程、犯人が他にいると。」

アスカ…「見当は付いてます・・・」

所で、どうして新田さんに逃げられたんですか？」

すると、狩屋刑事は桐山が連れ去ったと言った。

アスカ…「あたしのせいだ・・・」

あたしがあんな事言わなければ・・・」

狩屋刑事…「一体、何て言ったんだね？」

アスカ…「新田さんが殺人容疑で逮捕された事を言ったんです。

きつと、それで新田さんを！」

狩屋刑事…「君のせいじゃないさ。」

それより、犯人に見当が付いていると言ってたが・・・」

アスカ…「あ、その事でしたら、時遠さんが知ってますよ。」

狩屋刑事…「でも、時遠さんは亡くなってるんだぞ。死人が口を聞かか？」

アスカ…「時遠さん、言ってたんです。」

犯人が解ったって。」

狩屋刑事…「成る程、だから殺されたのか……。」

問題は誰に殺されたか？

それはもう解っている。

多分、犯人はあの人……。

狩屋刑事…「アスカ君、Loveの隣にもう一つ何か書いてあるぞ。」

狩屋刑事は何かを見つけた。

それは、l u f i t u a e bと、書いてあった。

どう言う意味なんだ？

俺は考えた……。

アスカ…「成る程、そう言う事か。」

狩屋刑事…「ダイイングメッセージの意味が解ったのかね!？」

アスカ…「ええ、解りましたよ。」

狩屋刑事…「教えてくれないか？」

アスカ…「内緒です。」

強いて言うなら、美しいものには毒があるって事です。」

今の発言で、狩屋刑事の頭は「？」でいっぱいになった。

アスカ…「さて、それじゃあそろそろ、推理ショー始めますか。」

俺は、狩屋刑事に頼み、今いる関係者を集めた……。

とは言っても、一人しかいない……。

事件の真相

俺たちは、現場にいた・・・。

愛美…「あたしを呼び出して何を始める気ですか？」

アスカ…「真相を暴くんですよ。」

愛美…「え、事件は解決したんじゃないんですか？」

アスカ…「時遠 織姫・・・彼女が何者かによって殺害されました。」

すると・・・。

愛美…「え、時遠さんが!？」

と、驚いて聞く。

アスカ…「ええ、殺されました。」

愛美…「どこで殺されたの？」

アスカ…「従業員の休憩室です。」

愛美…「時遠さん・・・。

木之元さん、時遠さんは・・・その、誰に殺されたんですか？」

アスカ…「私が貴方を呼び出した理由、ご存知でしょうか？」

愛美…「まさか、私を疑って？」

アスカ…「疑ってるも何も、貴方が犯人です。」

愛美…「待って、私が殺した証拠・・・あるのかしら？」

アスカ…「証拠・・・状況証拠だけならありますが・・・。」

狩屋刑事…「アスカ君!？」

狩屋刑事は、状況証拠だけでは犯人は捕まえない、確実な証拠を突きつけなくては犯行を認めない・・・俺にそう言った。確かに、状況証拠だけでは難しすぎる・・・。

アスカ…「黒川さん・・・。

三階に非常口はありますか？」

愛美…「あるわよ。」

アスカ…「そうですか・・・。

黒川さん・・・貴方、あの時に非常口を通ってますね。

そして、非常口を通った貴方は被害者に会い、被害者を包丁で刺した後、もう一度非常口を通じて元の場に戻った・・・。」

愛美・・・面白いわね。

続けて頂戴。」

俺は話を続けた。

アスカ・・・「本田 勝哉殺害後、新田さんが貴方を庇う為、自分がやったと名乗り出た・・・。」

だが、ここで思わぬ出来事が起こる・・・。

それは、時遠さんが殺害されてしまった事です。

彼女が殺される事によって、今回の事件の真犯人が貴方だと言う事を証明しちゃってくれてるんです。」

愛美・・・「しょ、証明!？」

アスカ・・・「現場に残ってたんですよ・・・。」

ダイイングメッセージが。

Love lufituaeb・・・そう書かれていました。」

愛美・・・「それが私と何の関係が？」

それに、Love lufituaebって英語じゃないよね。」

アスカ・・・「Love・・・これは愛。」

これは貴方が残した物・・・。

そして、lufituaebは被害者が残した物。

lufituaebはbeautifulを逆さにした物。

つまり、美しいの逆の意味を持っている・・・。

そう、lufituaebとは黒川 愛美さん・・・貴方の事なんですよ！

恐らく、被害者はbeautifulを逆さにする事で教えたかったんですよ・・・。

貴方が人間的に見ても美しくないと言う事をね・・・。

だってそうでしょ。

貴方は、本田さんを殺害した上、犯人に気づいた時遠さんを口封じ

に殺害し、更にLoveと書いて全ての罪を新田さんに擦り付けようとしたんですからね……。

『美しいものには毒がある』と言うのはまさにこのことですね。」「狩屋刑事…「なるほど、そう言う意味だったのか!」

黒川は、その場に膝を付き、本田を殺害した事、口封じに時遠を殺害したと言う全ての罪を認めた。

ただ一つ、予想外だったのは動機だ。

黒川は、後輩の新田の為に本田を殺害したのだ。

そして、それを新田が庇ったと言う事……。

何故、新田の為に殺害したのか？

それは、先ほどの新田の供述通り、新田が本田に侵されていたと言う事を知っての事だった。

可愛い後輩の為に手を汚すとは……後輩思いの良い先輩ではないか。

その後、黒川は逮捕され、新田の罪が晴れると自分から出て来た。

こうして、事件は解決をし、俺たちは帰路に着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6745a/>

名探偵アスカ 3殺目

2010年10月10日01時17分発行